

学術人を魅了する風土

天嶽地域構想学事務局長 千葉修悦(住田町)

「住田は、生きるに値する町である」—故・佐熊博住田町農協組合長(後の住田町長)は、よくそう話し、地域民を鼓舞した。

過日、縄文時代の人骨について研究している東北大学大学院歯学研究所の鈴木敏彦准教授から、こころに残る農業者との出会いをうかがった。

「住田町と聞いてとても懐かしく思いました。岩大付属中学校のとき、住田町のイチゴ栽培をしている農家を訪れました。あのときの人びとの温かさに触れました」。

こうした気風を、住田高校の初代校長千田玄先生は、「人の教えは篤くして自然の恵み豊かなり」と校歌に込め、次代を担う若者に語り継ぐ言葉とした。

中央大学経済学部の大須真治教授が指導する大須ゼミナールは1997年夏、住田町上有住の土倉を現地調査し、土倉出身のゼミ生の熱心な「調査地誘致」に、東京からの距離、経費、調査日数を考え、躊躇していた。が、彼

の波状攻撃のような「勧誘」に先生もゼミ生も陥落した。

この地に来て驚いたのは農集落をどのように考えているか、座談会をもつた。

当時の聞き取りや話し合い

を描写しているのが2016年6月発行の『源流の集落の息づかい』—岩手県住田町土倉をみつめてーである。

かつて、日本経済の急激な成長により、地方はのみ込まれた。住田町はあえぎながらも、独自の振興策を生み出した。集約と複合の住田型農業である。その精神は、1997年に制定した住田町民憲章にうたわれる。

「わたしたちは、ひとりひとりの創意と、恵まれた資源を生かし、勤労を尊び、産業の振興にはげみ、豊かな町をつくります」。

こうしたたゆまぬ努力の継承が生産、流通、加工、住宅販売にいたる地域林業のシステム化を進める住田型林業に

結実している。

今、この地が京都の学術人を魅了する。町民憲章に象徴される人びとに、文化を担う高い力量と、智慧を直感したのである。2007年「文化政策・まちづくり大学院大学設立準備会」を設立し、その代表をつとめる池上博京都大

学名誉教授は、農村のちからを次のように力説する。「人間を人間として尊重することこそが大切なことだ。それが農村にある。人を大事にする思想が農村の魅力であり、このことこそが今の日本にとって必要だ」

来春4月、一人一人の生命力の回復、地域の再生、そして明日への希望を内包した学びやが実現する。「文化政策・まちづくり学校」である。2021年4月の開校が待たれる同大学院大学に先行して、五葉山のふもとに新たな校史が刻まれる。